

文：田崎 敬修

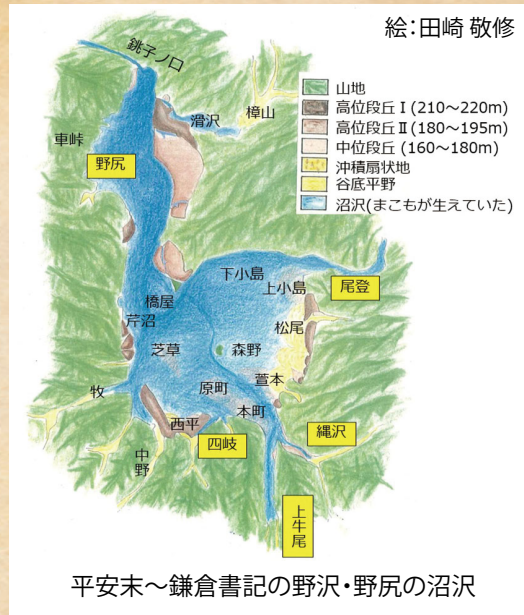
2回水没した野沢盆地

野沢盆地は山間地の小盆地で、阿賀川の河岸段丘面が野沢・尾野本・野尻地区の低平地となっています。約5000年前に沼沢火山が大爆発を起こして大量の軽石が火砕流となって只見川に流れ込み、軽石は水流で粉碎されながら各所の峽谷部で詰まっては崩壊し、野沢盆地に流れ込みました。しかし、下野尻の銚子ノ口で詰まったため野沢盆地は水没し、細かく粉碎された軽石が流下できず大量に堆積しました。軽石粒堆積層が標高180m付近まで見られますが190m以上の高位段丘上には堆積していないので、湖水面は180m以上でしたが190mまでは達していなかったと思われます。

2回目は平安末期～鎌倉初期頃で、やはり銚子ノ口が滝坂山の地滑りで塞がれ、野沢盆地が水没したようです。ただこの時は前回程水没せず沼沢化のようで、野沢には沼沢地に繁茂する真菰の花が咲いているという和歌を『愚管抄』の作者でもある天台宗座主慈円(慈鎮)大僧正(平安末期から鎌倉初期の人)が詠んでいることから推測できます。また、東京大学地震研究所に、「平安末期の嘉応2年(1170)、会津に大地震があつて滝坂山が地滑りを起こし、阿賀川・笹川合流点で銚子ノ口を堰き止めた」という資料があるそうです。水没を裏付ける地質・地形的証拠は見つかりませんが、銚子ノ口の閉塞によって野沢盆地が沼沢化したというのは間違いないでしょう。

泥浮山の肝煎・伊藤家に伝わる享和3年(1803)の文書に興味深いことが書かれています。「野沢平は牛海といって湖のようで、その湖の辺に尾登・咽尻(野尻)・両又(四岐)・牛尾・舟つなぎ沢(縄沢)という船着場があった。両又の北の如法寺という所から舟で牛尾に乗り付け泥浮山村を通過して居屋倉村へ出て上椿村で渡し舟に乗り柳津村へ出た。これは舟路で御城下への近道である。陸路は台倉山・諏訪峠・黒沢村・大杉山村を通過して切さ坂の茶屋で舟路と出会っていた。その後、牛海の水が退いて野沢平に村ができ東松峠の道が越後街道となつてからは、泥浮山村通りの道は絶えたという。」

現在の野沢の街並みは、この牛海の水が退いてから越後街道の整備とともに出来上がったものです。



絵：田崎 敬修

平安末～鎌倉書記の野沢・野尻の沼沢

今月の表紙

今月は、第37回西会津ふるさとまつりの桐ゲタ投げ全国大会から。今回で23回目となった今大会は、各部門に町内外から多くの皆さんが出場しました。一般女子の部門では日本新記録が生まれるなど、出場者による渾身の一投に会場はとも盛り上がりしました。(2ページから関連記事)

編集後記

今年のふるさとまつりも2日間じっくりと会場をまわらせていただきました。

このようなイベントの取材では、会場の皆さんが楽しんでいる様子を撮ることはもちろんですが、「食」も楽しみのひとつです(笑)。今年も新そばや味噌ラーメンなど、美味しいものが会場には盛りだくさん。冬支度が始まるこの時期は温かい食べ物がお恋しくなりますが、私は2日間とももりそばを美味しくいただきました。(秦)